

みる

いままで映画や舞台(芝居)のスケジュールをこの欄にのせてきました。映画館や芝居小屋から金をもらって宣伝してやるように思っている人が多い事と二ヶ月に一回の発行では、あまり役に立たないので、スケジュール掲載はやめることにします。

「蕪果座」という京都のクルーが、十一月五日に西成市民館で芝居をやった。風流痴譚へふうりがたんしんというむずかしい題の芝居だったが、いやはや面白かった。あらすじはざっとこんなものだった。

ある農村から出稼ぎにきた「蚕造」という男が、大阪の工事現場で事故に会い記憶喪失となる。

蚕造は過去を失なったとき病院を抜け出し、柳食堂前で倒れる。過去の記憶のない蚕造は、食堂の主人幸と朝子の世話を受けることとなる。

三丘の後に、蚕造の専任代が柳食堂にあらわれた事から話は急変し、幸を故郷の北朝鮮に送り届けることを蚕造が請け負い、八尾空港から飛行機を乗って……

郡昇作著



釜ヶ崎

どん底の取巻とその実態

センターの専務理事をやつた郡さんが昭和4年に出した「釜ヶ崎無情」の復刻版です。著者が今宮保護所長をしていた戦前の釜ヶ崎で、見たり聞いたりしたことを書きとめたり、感じるままに書いたりした「報告書」的な本です。

戦前(昭和四年)から昭和二十一年までが中心になつてゐるせい、労働者のことより、浮浪者やルンペン中心に書かれてゐるが、彼らの気持や生活がかなり詳しくかかれており、いろいろな統計ともあわせて、資料的価値の多い本です。おもしろい本とはいいがたいけど昔の事を知る参考になるでしょう。

(釜生協取扱い本)

林光一著

ルンペン学入門

ペッ出版 七五〇円

ルンペンについて、学者が研究して分析した本はいろいろあるが、当事者の側から出た本はかぞえるほどしかない、それも昔のものばかりで、最近は出ていない。

著者は上野を中心に、浅草、山谷を流して回つてゐる、その道十年の経験者だそう。

山谷でトヤの番頭をしていた時の事も書かれており、トヤ経営者の醜い姿に嫌気がさしてルンペンに入つたりする所や、行政(主に福祉事務所)とのケンカなど、共感するところの多い本である。

ルンペン、乞食、浮浪者として差別されている人々の考え、生き方を実によく描きだしているし、又アッコからわかるとルンペンになつた人々への助言など、実用書でもある。これ一冊あれば、食うには困らないよ。

釜ヶ崎ニユース

ホ五回夏まつり

76年8月12日〜15日



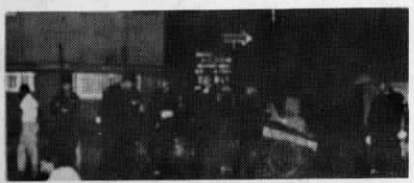
釜おどり、のど自慢、スイカ割り、すもう大会、他に夜店も仲間うちでやっていた。

盆になると、全国から釜ヶ崎へ里帰りする人（学生が三千人から五千人もいるといわれている）。
ここの前住者を中心とした夏まつりが、毎年、盆の三日間に三角公園を行われれている。
今年も五回目。



いかに楽しそうです。

←うつりが悪いが、橋新隊のホリさん。
まつりの警備(?)のために制服で登場。なぜか暗い所に立っているためうつりが悪いのです。



釜ヶ崎ニューズ

のがこんどは五年ぶり、五年分まとめたわりにはうすく二八ページ。そのなかの「業種別宿泊施設」という調べをうつつしておく。

「東萩荘改築」

三角公園の西側、松村食堂や職業安定所や生協のある通りの、それと反対側の方が改築工事をはじめた。中古のレコード店、ちいさなめし屋、古本屋などが並んだバラックぶりの一角が、九月着工で年内には四階建になるといふ。

も十二月にはでき上って正月は新しいアーケードの下でもうけようというところ。またそのあと路面の舗装もやりかえるそう。東京山谷でもいろは通りの商店街が一年前に新装しているから、釜も負けずに：：の感じだ。

「センター」「日雇労働者の就労と福祉のために」

「トビタ本通」
「アーケード改築」
同じく改築工事の話で、「トビタ本通商店街もアーケードを建てかえる工事中だ。これ

発行

種別	店数	数	収容能力
簡易宿泊所	201	201	41人
日払アパート	39	212	2人
一般アパート	242	558	3人
共同住宅	1	100	人
旅館	31	700	人
計	514	2871	6人

もう一つ、「飲食店営業種別」というのもうつつしておく。

種類	店数	計
屋敷店	123	625
営業	53	
立酒	167	
販売	20	
食	25	
移動	127	
ホ	36	
喫	52	
す	22	
お		
中		

特に飲食店の方は、たえず

数の変化があるけれど、大体のところはこの傾向というところ。喫茶店のふえてること、数字に出ている。立呑屋以上だ。ただしこの調査は、えて行く感じ。

動物園前一番街——となる。

投票で二位になったのは飛田一番街——だったそう。トビタという歴史の古い名前も、これからだんぜん消えて行く感じ。

「地下鉄の入口が

あたらしくなった」

「トビタ本通りの

名前が変わる」

アーケード工事がすむと商店街は年末大売り出しというダンドリ。それに先だって十一月はじめ、商店街のあたらしい名前が店主たちの投票で

作業服のマルゲン、立ち呑みの足立総本店の前は工事中だ

ったが、十一月一日からそこにあたらしい地下鉄入口ができた。

あたらしい名前は

道路を広げるための準備がすすんでいるわけで、次には天王寺寄りの入口があたらしくなる番だ。

「十一月十日に何が？」

最近の釜は、私服のおまわりさんがよくたむろしている。特に過激派の拠点？釜生協のあたりには一日中。夜は、作業服姿のおまわりさんがトランシーパーをもつてパトロール。このさわぎ、どうやら十一月十日に予定されている天皇の在位五十年記念式典が済むまで続きそう。

阿倍野の方では、天皇をヒボウするステッカーをはったアナキスト宅が搜索されたとか。

傷病手当に弾圧か？

第一号逮捕者でる

新聞によると、西成ケーサツは九月二十二日、「傷病手当を詐取」したとのことで、釜の労働者を逮捕している。

これは、仕事のないために、アブレ賃さえもらいにくくなったため、多くの労働者が、日雇健康保険の資格のあるうちに、病院にかかって、一日二千六百四十円の傷病手当をもらうようになったことへの弾圧の始まりだろう。

うわさによると、去年から釜ヶ崎界わいの医者は急に日雇健康による患者が増えて、ある医院などはあまり多いので、当局から何か言われたらしい。

前にアブレ賃をもらう人間が増えたときにも、やはり職安のしめつけ強化がおこなわれ見せしめのイケニエとして何人かがバクられたことがあった。

今度も、保険事務所と警察が手を組んでうった芝居だろう。

だいたい、釜に長くいれば、体の悪いところぐらいいくつでもある。日頃ポーナスももらえない（夏と冬の一時金はおせじにもポーナスと呼ぶには少なすぎる）俺たちが、仕事の少ない時当然の権利として、日雇健康保を使って体を直してどこが悪いんだろう。

チョットばかり働いたからといっても、サギでバクするほどの金額でもあるまいに、何を願がなならんのかいな。

ロッキードで何億という金が動きながら、半年もかかって今だにバクられない人もいるらしいし、児玉も小佐野も病気とかで逃げまわっている。

釜のアンコがチョット体を直して、アルバイトになにかしかかせいだからとて、それをせめることのできるような政府や警察やないだろりに。

それにしても、体を直すにもいろいろお上

のご気像を気にしながらせならんとは、何ともしんどいことです。

みなみなさま、せいぜいつつこまれないうちに気をつけましょう。

そのうち労災にも弾圧がくるかもしれな。労災でかかっている仲間も、つまらんことでバクられんよう気をつけよう。

笹島（名古屋）でドヤ火事

九月二十七日夕方、名古屋の笹島で火事があった。四十軒近い家が焼けたりした。

ドヤでまた、一人が焼け殺された。名古屋は、これを機会に、「環境浄化（？）のため」にドヤの立ち退きを進めるそうだ。

行政のやる事はいつも都合のわるい所を立ち退きさせるのに火事を利用する。浪速区の恵美のバラック街も同じ手で立ち退かされたが、その後、何一つ労働者住民のためになる

ような改革はされていない。

笹島もそうならないように願いたいものだ。

中原君「下請労働者」を発行

「渡世」元編集長「中原哲也」君が、新たに雑誌を発行した。

「下請労働者——甲斐性なし、能なし、怠け者、ワル、きちがい、ハンパ者、よどれ、等々とさげすまれ、労働者といわれている者こそ未来をつくる！」と長い副題のついたパンフレット形式の雑誌です。

内容は、

日本の革命を志す人たちへ、労働貴族を擁護する裁判所糾弾！ 図書月版斗争上告意見書、下請労働者は一つだ！ 泣き寝入りしなせぞ！ 久保田斗争ピラ、団結の哲学をうちたてよう「ひどいわ」主義に反対する。などで、四十八頁、ガリ刷り、百円です。

編集発行は「下請労働者連絡会議」、「下請労働者」編集部」で、西成区花園南一―八一
二七が連絡先です。

尚、「渡世」をうっている山王町の新開通商店街の「千石書店」にもおいてます。

底辺の人々の交流誌「軍手」

チョット遅れたけど、東京で出ている雑誌を紹介しておこう。

「軍手」――底辺の人々の交流誌、季刊、二十六頁、百円。

目次は、

発行の主旨、下積みで働くおいらたち――鹿島のドブねずみ、モダンタイムス――軍手の使い方、警備員日誌より、出かせぎ人はなく、おとこはつらいよ、社会の裏喜怒――底の惑星の真相は、いのちと鋼管、児玉と高橋義人――、マンガぐんておじさん、詩おいらウスノロか、からだのコーナーなど。

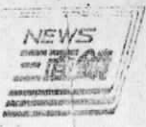
釜生協でも扱っています。

飛田本通のアーケード工事のことは四二頁でもふれているが、工事の施主である商店主の一人がこんなことをいっているのを耳にした。

「あのトビの連中は四時二〇分には帰りたくしとるわ、あれはいかんよ、仕事は五時までとしまったもんやないか、なあ」

話相手も同じく商店の主人だったが、何も答えなかった。で、はたで聞いていた者として一言させてもらう。

トビばかりでなく、職人にも土方にも、仕事のダンドリというものがある。それが少し早く終ることもたまには仕方がない。というのが第一。第二には、仕事の五時じまいというのは、もう古い常識なのだ。四時半じまい、四時じまいは何年も前からうんと広がっている現場斗争の成果だ。釜に近いトビタ本通りの商店主のニンシキ不足は情ない。



いて野めた七万円を、新宿郵便局へた、幸いだったのは、奪われたから故郷の妻に送り届けなければ、カバンに金を入れてなかつたことならなかつた。手紙をすませて、だけである。

出稼ぎにむごい東京サバク

路上強盗にやられ頭部重傷

「田舎に帰らせませす」嘆く妻

大部会のヤミのなかで、心身に深いダメージを受けた二人の出稼ぎ労働者が故郷に帰ろうとしている。宮城県米原町出身の山之内幸吉さん(五十)は、九月二十七日夜、東京市豊島区西新井七丁目の路上で、いきなり頭をなぐられ、持っていた手紙やカバンを奪われた。

その日、山之内さんは、住居前(住居前)の田舎内の建設現場を夕方、はたはと引き返した。十日間働

宿にしている新宿区白町二丁目、着ていた表料品が盗られ、辞して月十六、七万円を強盗に奪われ、強盗にやられ、頭部重傷。妻と子ども四人、当時、経に送るのも年四回に決めた。その

宿にしている新宿区白町二丁目、着ていた表料品が盗られ、辞して月十六、七万円を強盗に奪われ、強盗にやられ、頭部重傷。妻と子ども四人、当時、経に送るのも年四回に決めた。その

宿にしている新宿区白町二丁目、着ていた表料品が盗られ、辞して月十六、七万円を強盗に奪われ、強盗にやられ、頭部重傷。妻と子ども四人、当時、経に送るのも年四回に決めた。その